

20世紀初頭のアメリカ進歩主義教育運動における 講堂の出現と活用

—集会活動に基づくカリキュラム改革—

佐藤 隆之

1. はじめに

19-20世紀転換期のアメリカにおいては、移民の増加や都市化などの影響による就学者数の急増を受けて、とくに都市部においては新しい校舎が次々と建てられた。その校舎には、児童生徒が一同に会することができる講堂 (auditorium) あるいは集会場 (assembly hall) や集会室 (assembly room) が設けられるようになっていた¹。学年を超えて大勢の児童生徒が集まる講堂において、教科を単位として教室で行われる教授 (class [room] instruction) や学習 (class [room] work) をそのまま適用することは難しかった。そのために講堂における集会活動については、通常の教室での教授や学習とは異なる目的や方法が考案されることになる。それでは、そもそも20世紀初頭に講堂はどのような過程を経て出現したのか。新たに設置された講堂を活用して、いかなる教育を行おうとしたのか。講堂の出現や活用は、子どもの生活経験に重点をおいた、当時の進歩主義教育運動からどのような影響を受けたのか。アメリカ進歩主義教育における教育環境についての改革に関わるそのような問いに答えるための基礎作業として、20世紀初頭のアメリカ都市部における講堂の出現と活用的一端を概観することが本稿の目的である。

考察の対象としては、とくに就学者数の増加が著しく、新しい校舎が多く建てられたニューヨーク市を主に取り上げる。まず、ニューヨーク市における講堂の出現過程を概観する。その上で、その講堂を活用してどのような教育を行おうとしたのかということ、ニューヨーク市教育委員会が1917年に公刊した『学校集会—講堂における活動のためのハンドブック』(Nifenecker 1917)に基づいて分析する。それにより、講堂における集会活動を活用して、教室における所定の学習課程の教授と学習の活性化、カリキュラムの統合、公民・市民性教育の充実といった、進歩主義教育の理念を、形式的にはあるが反映したカリキュラム改革が構想されていたことを明らかにする。

2. 20世紀初頭のニューヨーク市における学校建築と講堂

2.1. 公立学校における講堂の出現

とくに都市部の学校では1900年以降に、講堂、図書館、体育館などの、何らかの目的に特化した大きな空間がつくられるようになる (Gutman 2003: 4)。宮本によると、「19世紀末から20世紀初頭にかけて、工業化の進展や移民の流入によって人口が急増しつつあった都市部では、多くの子どもを収容できる大規模な校舎が次々に出現し、学校建築は大きな変貌を遂げつつあった。この間に出現した校舎は、まずは、教場をいくつかの教室に分割し、その後、教科別の特別教室、作業場、図書館、幼稚園、体育館、講堂などのいろいろな種類の設備をもつようになった」のである (宮本 2011: 11)²。都市部では、「教場をいくつかの教室に分割」する時代を経て、特定の目的に特化した多様な空間を用意する時代へと向かう中で大規模校舎が建てられた。講堂もその過程において出現したと考えられる。

そのことをここではニューヨーク市に注目して概観すると、1870年代には集会のスペースを小さい教室に区切って使うことが推奨された。その理由としては、財政の逼迫によりスペースを効率的に使用する必要があったことにくわえ、「教育的態度の変化」があったという。その「変化」とは、「大きくて区分されていない集会のスペースは、より小さな教室における専門的な教授にとって代わられるべき」というものであった (Diamondstein-Spielvogel 2011: 377)。1870年代以前は、できるだけ大きな教場で、できるだけ多くの子どもを一斉に教える効率性や経済性が追求された。しかし、1870年代に入ると、教室数を増やして多様な子どもに対応できるようにすると同時に、一教室あたりの人数を減らしてより専門的な内容が教授しやすいようにすることが重視されるようになっていたのである。この時点では、講堂のような広いスペースを、何らかの教育的配慮によって設けようとする意識は薄かったと推測される。

ボストンの建築家フィールライト (Edmund N. Wheelwright) が1901年に著した『学校建築』によると、20世紀に入ってもマサチューセッツ州では20年前の建築様式で校舎が建てられることがあった。そのような校舎には大きな教場があり、それをスライド式や可動式の仕切りでいくつかの教室に分けて使用した。この方式はイギリスの学校における「いわゆる“教場”式 (“schoolroom” system) から教室式 (class system) への変化」が、アメリカに徐々に導入された結果とされる (Wheelwright 1901: 79-80)。1870年代頃から広いスペースを仕切りで区切って教室として使用するという方式が採用された背景には、そうしたイギリスの学校の影響もあったと推察される。

フィールライトによれば、マサチューセッツ州では、ほとんどのグラマー・スクール³には集会場があった。ない場合にも、「2、3の教室が折りたたみ式のドアかスライド式ドアか回転式の仕切りによって、一つにして使えるようになっている」 (Wheelwright 1901: 88) とされる。

ニューヨーク市でも1901年当時、大きな教場を仕切りで区切って教室とし、必要に応じてその仕切りを外して使用することがあった。たとえば、ニューヨーク市の第165公立学校 (写真1) は、

図1のように、「上階は6から8の教室に分かれており、スライド式ドアによって集会室としても使用できるようになっている」(Wheelwright 1901: 118)。



写真1 (Wheelwright 1901: 119)

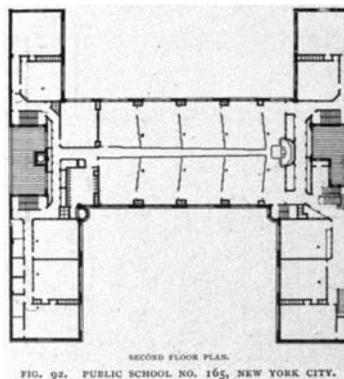


図1 (Wheelwright 1901: 120)

図面からわかるように、その形状からH型と呼ばれたこの校舎は、周りが街路に囲まれた環境が悪い土地向けに設計されたものである。両側には窓や扉などの開口部のない壁があり、正面は凹んでいる。それにより、周囲の騒音や排気などを壁で遮断したり、そのような環境から教室をなるべく遠ざけたりするように工夫されている (Wheelwright 1901: 110)。

このH型校舎を開発したのは、ニューヨーク市教育委員会の校舎管理官 (Superintendent of School Buildings) を1891年から1923年までの30数年間務めたシュナイダー (Charles B. J. Snyder) であった。H型校舎の発案によりシュナイダーは、「公教育全体を改革した」ともいわれる程、大きな影響を与えた (Diamonstein-Spielvogel 2011: 446)。

ニューヨーク市ではこのシュナイダーが、H型校舎を中心として大規模校舎を数多く建てた。折しも1898年には、現在の5行政区 (ブロンクス、ブルックリン、マンハッタン、クイーンズ、スタテンアイランド) からなるニューヨーク市が誕生した。新たなニューヨーク市政の下で、「基準化された学校の建設」が開始された (Diamonstein-Spielvogel 2011: 322)。そこで「基準」となったのが、土地が高価で狭いという条件に合わせて、多くの児童生徒を収容できる大規模な校舎であった。

その校舎の中には、やはり大規模な講堂がつけられてゆく。写真2は、1900年代始めにシュナイダーによって建てられ現存する、第95公立学校の講堂である。大きな部屋一面に椅子が置かれている。

20世紀初頭に出現した講堂のもう一つの特徴として、校舎が面している通りから直接出入りできるようにした集会場が設けられるようになったことがあげら



写真2 (Stieber 2012)

れる。そのような設計は「初期ニューヨーク市の典型的な小学校」とされる (Diamondstein-Spielvogel 2011: 447)。

ニューヨーク市と同じく大都市であるシカゴの建築家パーキンス (Dwight H. Perkins) は、「コミュニティの中心としての公立学校という進歩的な理念を実現化した」といわれる (Nelson 1988: v)。パーキンスは、講堂を利用して、講演、映画上映、政治問題のディスカッション、ダンスのレッスン、運動のゲームなどを、毎放課後、毎晩行うことを提案した (Nelson 1988: 107)。

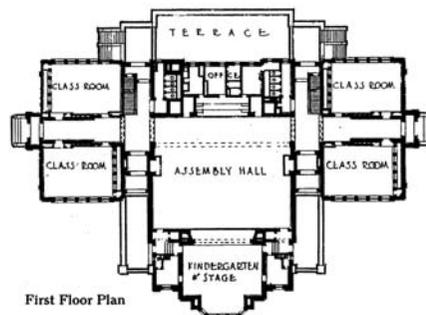
そのパーキンスによると、1900-1905年には、公的な使用と防火を主たる理由として学校建築が変化し、一階に集会室をもつ校舎が普及した。それは学校の近隣からの要望に応え、「コミュニティ・センターとしての講堂という目的 (community center auditorium purposes)」に合致した校舎であった (Perkins 1915: 293-294)。1900年代に入ると教育委員会も、地上階に集会場を設置することを基準とするようになっていた (Nelson 1988: 21-22)。

図2は、パーキンスの設計によるイリノイ州エヴァンストン第76学区にあるオークトン・スクールの図面である。集会場が校舎一階の中央に位置し、その両脇に教室が配置されている。集会室のステージは幼稚園兼用となっていた。写真3はステージ兼幼稚園から集会場を写したものである⁴。



View of Kindergarten Looking Toward Assembly Hall

写真3 (Perkins 1916: 3)



First Floor Plan

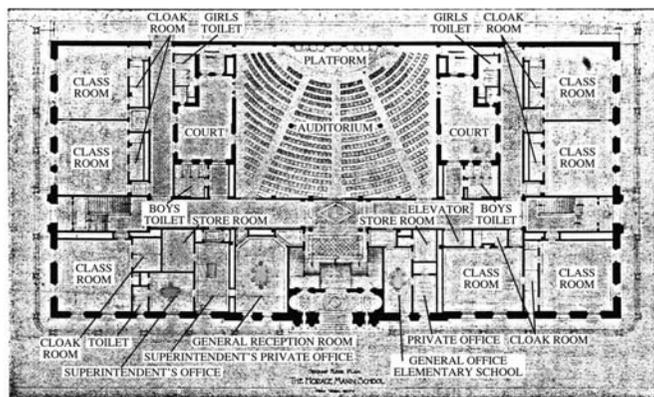
図2 (Perkins 1916: 3)

2.2. ホーレスマン・スクールの講堂

ここまでニューヨーク市の公立学校を中心に講堂の出現過程を概観してきたが、私立学校の事例として、ニューヨーク市マンハッタン行政区に位置するコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ附属のホーレスマン・スクールの校舎を取り上げてみたい。ホーレスマン・スクールの校舎は1901年に新設された。同校舎は、教職志望者の教育実習のための学校であるよりは「完璧に整えられた学校」のモデルとなることを目標として、「すべての設備において完全であり、身体的精神的衛生の原理において最善と考えられるものに従って管理されている」(Dutton 1902: 28)と指摘されるとおり、当時の最先端をゆく校舎であった。

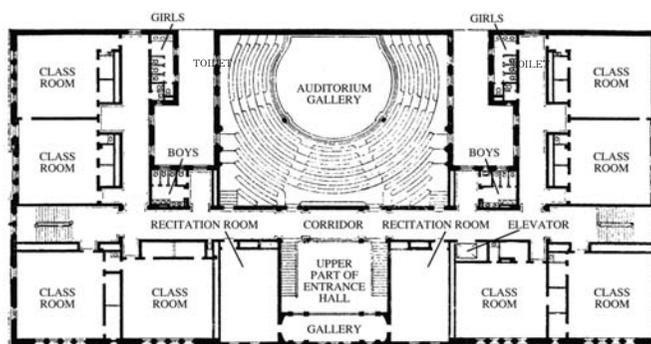
図3は校舎の1階、図4は2階の図面である。講堂は校舎中央に位置し、二階建てであった。二

階にはバルコニー (gallery) がついている。大きさは16,4m×21,3mで、収容人数は約1000人であった。ホーレスマン・スクールの全児童生徒が一堂に会することができた。床は前方から後方にかけて緩いスロープになっており、後方からでも見やすいようになっている。天井や両側の前後の窓にはステンドグラスがつけられていた。装飾は緑を基調とし、入口は淡黄褐色とテラコッタで装飾されていた (Dutton 1902: 33)。



Ground Floor Plan.

図3 (Dutton 1902: 32)



Second Floor Plan.

図4 (Dutton 1902: 34)

写真4は講堂を左側から、写真5は右側から撮ったものである。写真を見ればわかるように、座席は各列とも弧を描いており、どこからでも舞台と正対するようになっていた。このような装飾や工夫が施されたホーレスマン・スクールの講堂は、校舎中央に配置された、大規模で劇場のような講堂であった。



写真4 (Columbia University, Teachers College 1912: 7)



写真5 (Russell, et al. 1902: 8)

2.3. 1908-1917年の小学校における講堂の設置状況

その後の動向を見てみると、1919年には、1908-1917年の間に“American School Board Journal”誌に報告された126の小学校校舎を対象とする空間構成についての調査報告が出されている(Koos 1919)。その中では、校舎に配置されている各種の部屋の数と割合が、1908-1912年と1913-1917年の5年間に区切り、1万人未満のコミュニティと1万人以上のコミュニティに分けて一覧表にされている。部屋の種類は、教室、暗唱室、幼稚園、理科室、手工室あるいは作業室、物置部屋、家庭科室、裁縫室、調理室、食堂、食料品室、家庭科用倉庫、図書館、体育館、プール、シャワー室、着替室、遊戯室、保健室、ロッカー室、衣装室、昼食室、教員室、教師用化粧室、校長室、待合室、用務員室、自転車置き場、備品室、役員室、トイレなど多岐にわたる。

講堂については、「講堂あるいは集会室」、「体育館と講堂の併用」、「講堂の舞台」などの項目で報告されている。「講堂あるいは集会室」と一括りにされているように、その二つは明確に分けられていない。「体育館と講堂の併用」という項目があるのは、「体育館が講堂として使われることが多く、体育館がある学校は講堂がないとはいえない」との判断による(Koos 1919: 20)。1万人未満のコミュニティでは「体育館と講堂の併用」は報告されていないので、体育館そのものがなかったということになる。「講堂の舞台」という項目は講堂に舞台があるかどうかを示すものであるが、舞台がある方が子どもが見たり聞いたりする上で教育的な環境といえる。

1万人未満のコミュニティでは、「講堂あるいは集会室」がある学校が、1908-1912年は7校(うち舞台があるのは5校)で25.9%、1913-1917年は15校(うち舞台があるのは14校)に増えて51.7%となっている。1万人以上のコミュニティでは、1908-1912年は17校(うち舞台があるのは12校)で53.1%、1913-1917年は19校(舞台はすべてに設置)で50.0%となっている。また、「体育館と講堂の併用」は、1908-1912年は1校、1913-1917年は2校となっている。合計では、1917年の時点で「講堂あるいは集会室」がある学校は58校の46.0%、うち舞台があるものが50校の39.7%であった(Koos 1919: 15)。限られたデータではあるが、1917年頃にはコミュニティの大小

にかかわらず、二つに一つの小学校に講堂があり、その大半に舞台が設置されていたと考えられる。

他の部屋と比較すると、講堂あるいは集会室が図面に見られる頻度は第8位であった。頻度が高かったのは上から、1. 教室、2. 衣装室、3. 男女トイレ、4. 校長室、5. 教員室、6. 備品室、7. 女子遊戯室であった。その後にくるのが講堂あるいは集会室であった (Koos 1919: 21-22)。この結果をふまえて、小学校の校舎に最低限設置されているのは、教室、衣装室、校長室、教員室、備品室、男女トイレの6つとされる。10,000人以上の都市については、この6つに講堂や集会室を加えることができる (Koos 1919: 23)。

このような普及を背景として、1917年にニューヨーク州では、「教室が8つ以上ある校舎の設計においては、集会室か講堂のどちらかを用意すべきである。教室が8に満たない場合は、全児童を集会において収容できる一つの部屋か、二つ以上をつなげる部屋がなければならない」と規定された (University of the State of New York 1917: 16)。では、このようにして出現し普及をみていた講堂においては、どのような教育が行われたのだろうか。そのことをここでは、1917年にニューヨーク市の教育委員会が公刊した『学校集会—講堂における活動ハンドブック』に基づいて分析する (Nifenecker 1917)。タイトルが示すように同書は、講堂で実際に活用できる様々な学校集会について解説したものである。その内容をみると、講堂における集会活動を導入することにより、教室における学習を活性化したり、統合したり、社会生活と結びつけたりすることが構想されている。講堂を活用した集会活動によって、子どもの生活経験を重視した進歩主義教育を反映させたカリキュラム改革を実践しようとしていたと考えられることについて以下に明らかにする。

3. 講堂における集会活動に基づくカリキュラム改革

3.1. 教室における学習の活性化—講堂と教室の往還

『学校集会』において学校集会の手段と方法は、次のように分類されている。

1. 視覚的教授：幻灯機とスライド、映画
2. 講演：講堂における活動の担当教師による講演、それ以外の担当による講演、生徒による講演、部外者による講演、講演に関する試問
3. 音楽：参加型として合唱や楽器、鑑賞型として蓄音機などの利用やリサイタル
4. 聖書講読（聖書の適当な章節をとりあげて読む活動 [Nifenecker 1917: 37-38]）
5. 朗読、暗唱、音読など（声に出して読むこと全般に重点をおいた活動 [Nifenecker 1917: 39-42]）
6. 物語を読む（おとぎ話、笑い話、自然の動植物に関する話、歴史に関する話などの読み聞かせ [Nifenecker 1917: 42-49]）
7. 劇化、演劇、文化祭など
8. 体操：フォークダンス、ドリル訓練

9. ディベートと競技会

10. その他：学校フォーラム、講堂質問箱（自分たちが悩んでいる問題を書いて箱に入れて、集会で取り上げる活動 [Nifenecker 1917: 68]）

これらの集会活動の多くは、講堂で単発的に行われるのではなく、教室で行われる学習課程の教授や学習と結びつけられている。講堂を利用した集会活動と教室の組み合わせは、大きく二つに分けられる。一つは、教室における学習について、講堂で発表したり発展させたりするものである。いま一つは、その逆に、講堂における活動について、教室で準備をしたり、振り返ったりするものである。

前者の教室における学習に関わる講堂での集会活動からみると、たとえば、「9. ディベートと競技会」のディベートの論題は、学習課程で扱ったことの中からも取り上げられた (Nifenecker 1917: 66)。「10. その他」で紹介されている「学校フォーラム」とは「集会の時間にその日のトピックあるいは話題について生徒が自由に話し合う」ものであり、話し合うことは、「カリキュラムの中の様々な内容」からも選ばれた (Nifenecker 1917: 68)。また、「文学史、地理、自然学習」などを中心として、「通常の授業の中から、それぞれのクラスが歌、暗唱、劇化、講演などの方法によって、集会活動で発表するプログラムが選ばれることもある」とされる (Nifenecker 1917: 74)。「文学史、地理、自然学習」のような歴史、地理、自然などを対象とする内容は、子どもたちが自分たちで調べて発表しやすく、聞き手も興味をもちやすいところから、学習課程の中でもとくに講堂での学習発表会に向いているとみなされたと推察される。

通常の学習課程の延長線上において行われる各種クラブ活動の発表も、講堂で行われる活動の一つであった。オーケストラ、合唱団、文学クラブ、ディベートクラブ、理科クラブ・理科実験クラス、アートアンドクラフツなどの成果を、学校全体の前で披露する格好の機会とされた (Nifenecker 1917: 74)。

後者の講堂における集会活動に関して教室で行うものとしては、まず「1. 視覚的教授」において、講堂で見るスライドや映画についての事前・事後の学習が言及されている。たとえば、教師が提示したいと考えているトピックスを具体的に示すスライドを選び、一人ひとりに課題を割り振ってプレゼンテーションさせる。児童生徒は教科書や、教室や図書館にある参考書を調べて準備する。それにより、教材について学ぶだけではなく、表現、主体性、責任などが身につけられる。また、講堂における講義を教室で振り返ったり、暗唱したりするなどの活動が行われた。そのような活動を取り入れることにより、講義法の受動性を補うという効果が指摘されている (Nifenecker 1917: 27-28)。

「9. ディベートと競技会」のディベートでは、「生徒はディベートの準備をするために、図書館で資料を探し、参考文献を詳しく調べ、集めたデータを分析し、説得力があり論理的でなおかつ印象に残るように材料を並べる」。競技会では、作文、歴史に関する情報、綴りを間違いやすい単語、地

理(都市の位置)などの学習成果を、講堂にて全体で競い合った(Nifenecker 1917: 66)。

整理すると、このような教室と講堂を往還して関連づける諸活動は総じて、教室で行われる所定の学習課程の学習を、講堂における集会活動により活性化することをねらいとしていた。学年を超えて多人数で行われるという特性を生かし、責任感、緊張感、やりがいなどをもたせて教室での学習に力が入られるようにする。それにより、表現力や主体性のような能力や態度を育成する。たとえば、「集会での暗唱、朗読、音読は、教室での読みの活動を動機づけるうえで重要な役割を果たす」(Nifenecker 1917: 39)といわれるように、教室での読みの活動は、講堂での「朗読、暗唱、音読」という学校全体の活動が後に控えていることによって、熱心に取り組みられると見込まれている。教室で学んだことを講堂での発表において発展させたり(ディベート、学校フォーラムでの話し合い、劇化、クラブ活動の成果発表)、定着をはかったり(暗唱、各種競技会)する活動や、講堂で行う活動について教室で準備する活動(ディベート)にも、そのような効果が期待されたといえる。

講堂ではまた、特別な日、学校祭、祝賀会などに学校全体で取り組む活動が行われる。その典型である合唱は、社会化に大きな影響を与えてより大きな集団における責任感やチームワークを育み、それが「教室での教授におけるフォーマルな学習を動機づける」とみなされている(Nifenecker 1917: 33-34)。そう指摘されるように、講堂における集会活動は、学級を超えた集団で社会性を育むと同時に、教室における通常の「フォーマルな学習」とは異なる、非日常的でインフォーマルな学習の機会を与えるものでもあった。学外から招いた講演者の話しを聞いたり、映画やスライドを大勢で見たりするような教室とは異なる環境下でのインフォーマルな学習が刺激やリズムを与えて、講義法の受動性を補い、教室における学習を活性化することが見込まれていたのである。講堂で行う活動についての事前学習(スライドや映画の事前学習とその発表)や、事後に復習や暗唱などで定着をはかったり発展させたりする学習には、そのような効用も認められていたと考えられる。

3.2. 講堂における集会活動に基づくカリキュラムの統合

講堂における集会活動で取り扱う内容は、「カリキュラムの中のほとんどすべてが集会活動のための材料を形成する」とされるように、所定のカリキュラムほぼすべてが対象とされた。しかし、「学校における現在の学習課程は、人間の経験を切り離れた区分から構成されており」、教材は学年単位で「厳格に組織」されている。そのため、カリキュラムの内容を、複数の学年が一堂に会する講堂での集会活動にそのまま導入することはできない。集会活動では、教科の区分や教材の厳格な組織にはとらわれない柔軟性がまずは肝要とされる(Nifenecker 1917: 69)。

それに加えて、集会活動を活用してカリキュラムのあり方そのものを改善することも意図されている。「人間の経験を切り離れた区分」に厳格に基づいて組織されているカリキュラムは、子どもの生活経験からも切り離されている。そのために興味をもち、学ぶ必要性を感じて学ぶことができにくい。そのようなカリキュラムを改革することは、進歩主義教育の大きな課題であった。それに関連して次のように提案されている。

集会の時間の学習を、学習課程の区分によって許される以上に、人間の経験のより大きな単位に基づいて行うこともできる。そのような学習のより大きな中心は、子どもの生活や、ニーズと興味に、より密接に関連づけることができる。そのような単位をとおして集会活動は、学習課程の専門化された教科をより強く結びつけることができる。それによって、そこでの学習内容の教授は結果的に統一され、統合されることになるだろう。(Nifenecker 1917: 70)

ここにおいては、集会活動は、既存の教科区分を超えた「人間の経験」という「より大きな中心」に基づいて行いうることが指摘されている。そうすることにより、そこでの活動の内容を、子どもの生活に近づけ、子どもの要求や興味に即して教え学べるようにすることができる。そこにおいてカリキュラムは、教科の区分が取り払われて一つに統合されるというのである。

集会活動によるそのようなカリキュラム改革を推進するために、「集会活動は通常の学校の学習から派生すべきである」とも主張されている。集会活動という「より大きな単位」において、各教科の技能や知識を総合的に学べるようにする。それにより集会活動は、「学習課程の中の異なる教科の学習過程 (learning process) をより充実したものとするように動機づける」ことができると考えられた (Nifenecker 1917: 70)。集会活動は、子どもの生活経験を中心とするカリキュラムの統合を実現する方法とみなされているのである。

講堂は、その統合を実践する空間を提供するという役割を担っていた。すなわち講堂には、コミュニティや社会における人⁵・出来事・問題などと学校の接点や交点として、学校を外界に開くことが期待された。その開放性により学校外の社会生活と結びつけられた子どもの生活経験を軸として、既定の学習課程を統合することがもくろまれたのである。

このカリキュラム統合の基盤となる「より大きな中心」としては、「社会的コミュニティとしての学校生活」、「学校外のコミュニティの生活」、「自然の世界」、「芸術、文学、音楽の世界」、「国家の生活」の5つがあげられている。「社会的コミュニティとしての学校生活」、「学校外のコミュニティの生活」、「国家の生活」というのは、子どもが実際に属している集団である。「自然の世界」と「芸術、文学、音楽の世界」は、そのような集団が存在している世界を構成する自然と文化ということになるだろう。この5つが集会活動に基づくカリキュラム統合の基点とされた。

具体的な統合の例としては、「7. 劇化、演劇、文化祭など」の中の学校祭は、「カリキュラムの中の多様な教科—文学、作文、芸術、音楽、踊り、手工などを関係づける力がある」と指摘されている (Nifenecker 1917: 56)。また、野外劇について、図書館や博物館で調べものをしたり、衣装を調べたり制作したりするなどの活動が可能であり、「学校における多くの諸活動を関連づける」ことができると指摘されている (Nifenecker 1917: 57)。

さらには、当時の進歩主義教育運動の中で開発や実践が進められていた「プロジェクト」として、集会活動を展開することも言及されている。「学校銀行」、「学校新聞」、「学校運動会」、「学校オーデュボン協会 (School Audubon Society)」⁶といった「学校プロジェクト」に、とくに興味をもった子ど

もが中心となって、学校全体で取り組むことが提案されている (Nifenecker 1917: 71)。講堂を活用して行われるそのような「プロジェクト」においても、教科の枠を超えた総合的な学習を実践することがもくろまれていたのである。

3.3. 「学校外のコミュニティの生活」に基づく公民・市民性教育

カリキュラム統合の「より大きな中心」の一つとされた「学校外のコミュニティの生活」は、講堂における集会活動を通して学校外の社会生活やコミュニティの活動に目を向けさせることによって、市民を育成するカリキュラムを改善する手段としても注目される。「学校外のコミュニティの生活」については、「いろいろな点で学校は外部の生活に入り込んだり、ふれたりしている。コミュニティの活動は子どもたちの関心を惹きつけ、興味をもたせる」と説明され、それを重視する主たる目的として、「社会的意識、公民としての意識」や、「市民としての誇り」の涵養があげられている (Nifenecker 1917: 75)。講堂における集会活動により、学校内に学校外の生活や活動を持ち込んで子どもにふれさせて、それに関わる知識や技能や態度を学べるようにすることがもくろまれていたのである。そこに主眼をおく集会活動は、公民・市民性教育を改善する役割も担っていたと推察される。

そのために想定されるトピックスは、大きく三つに分けられている。第一は、「産業と職業」である。具体的なトピックスとしては、自分たちが生きていく上で欠かせない衣食住や、自分たちが生きているニューヨークの産業と職業があげられている。人間関係から生じる義務や責任、働くことの尊さ、すべての職業への敬意などを養うことがめざされる。とくにニューヨーク学習については、ニューヨーク市民としての誇りをもたせること、よりよい職業選択ができる情報を与えること、より知的な労働者でありかつよりよい市民であるために学び続ける重要性を理解できるようにすること、などが目標とされている (Nifenecker 1917: 75-77)。

第二は、「制度的・公的生活」である。ここでの目的は、端的にいうなら、「良い市民性 (good citizenship)」の育成ということになる (Nifenecker 1917: 78)。公共のサービス (警察官、消防士、清掃、ゴミの収集、水の供給、ガス、電気、電話、交通、健康)、市政、公共機関 (学校、公立図書館、病院、博物館など) などの学習を通して、従順、助け合い、貧困対策、自制、勇気、フェアプレイといった市民として身につけるべき倫理や知識などを習得することがめざされる (Nifenecker 1917: 77-80)。

第三は、「ニューヨーク市の歴史」である。ニューヨークの始まりから今日までの歴史を学び、自分たちが生きているニューヨークについての関心や理解を深め、ニューヨーク市民としての誇りや責任感を養うことが目標とされる (Nifenecker 1917: 80-81)。

講堂において以上の三点を中心とする集会活動を行うことにより、子どもの興味関心を生かした公民・市民性教育とすることが論じられているのである。

4. おわりに

本稿においては、20世紀初頭のアメリカ都市部における講堂の出現と活用について、ニューヨーク市を主たる対象として考察した。大きな教場を仕切ってより専門的な教授ができるようにした1870年代頃からは、就学者数が急増した19世紀末頃に推移する過程において大規模な校舎が建てられる中、大規模な講堂が出現したことをまず概観した。学校と地域を結びつける「コミュニティ・センターとしての講堂」が登場したことも明らかにした。私立学校の事例として取り上げた、1901年に建てられたコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ付属のホーレスマン・スクール校舎の講堂も、1000人収容の劇場のような大規模な講堂であった。その後1917年頃に講堂は、二校に一校の割合で見られるようになっていたことが報告されていた。

講堂の活用については、講堂における集会活動を生かしたカリキュラム改革という視点から、講堂との往還による教室における学習の活性化、講堂における集会活動に基づくカリキュラムの統合、「学校外のコミュニティの生活」に基づく公民・市民性教育の改善といったことが構想されていたことを指摘した。その構想には、行動の出現と活用の背景にあった進歩主義教育の影響を読みとることができた。

カリキュラム改革の基点とみなされたことが示すように、講堂には校舎という教育環境の中でも独自の機能や意義が認められていた。講堂は、特定の学級・学年・教科などに固定されていないニュートラルな場所であると同時に、学校内外に開かれた公的な空間でもある。通常の学習課程の教授と学習を行う教室とは対照的な、非日常的でインフォーマルな空間にもなりうる。講堂における集会活動に基づくカリキュラム改革は、そのような講堂の中立性や公共性（開放性）や非形式性（非日常性）といった特性に着目して、当時勢いを増していた進歩主義教育の主張を取り入れようとした試みとあってよいだろう。

ただし、この構想が進歩主義教育の理念をどの程度忠実に反映したものであったのかということについては、慎重に判断しなければならない。「20世紀初頭に出現した大規模な校舎は、技術の向上、芸術性の追求、設備の豊富化という特徴を明確に示していたものの、子ども中心の教育理念を必ずしも体現したものではなかった」と考えられるからである（宮本 2011: 18）。20世紀初頭に出現し、その活用が目された講堂における教育は、そのような制約や限界を抱えながら、校舎そのもののあり方から教育環境を改善する試みに先鞭をつけたのである。本稿では不十分ながらも着手されたその試みの一端を明らかにしたが、そこにおける学校建築やそこで実践された教育内容・方法などの実際や特徴を、実証的に検討することが課題として残されている。

付記：本稿は、平成24年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（C）による研究「20世紀初頭のアメリカの小学校における講堂と多目的室の出現過程に関する史的研究」（研究代表者：宮本健市郎、課題番号：23531031）の成果の一部である。

[注]

- 1 講堂, 集会場, 集会室といった用語の使い分けは, 必ずしも明確ではなかった。本稿で取り上げる『学校集会』においても, 「講堂あるいは集会における活動 (auditorium or assembly exercises)」(Nifenecker 1917: 11) という表現にみるように, 講堂と集会は峻別されていない。基本的にここでは「講堂」を用い, 適宜「集会場」や「集会室」を用いることとする。
- 2 アメリカ学校建築史は, 近代的な学年制の教室が標準化されてゆく 1789-1921 年の第 1 期と, 進歩主義の理念と実践が学校建築に影響を実際に与えていく 1921 年以降の第 2 期に分けられるという見解もある。この場合も, 第 2 期の建築は, 既に第 1 期に開発されていたとされる (Gislason 2009: 231)。
- 3 マサチューセッツ州では, 他州とは異なり, 幼稚園レベルをプライマリー, 小学校レベルをグラマーに分けていた (Wheelwright 1901: 81)。
- 4 講堂と幼稚園は隣りあわせてでつくられたり, 講堂のステージと幼稚園が兼用ということが多かったようである。このような講堂の利用法は, 幼稚園の成立や普及とも関係していると推測される。
- 5 たとえば, 警察, 消防署, 水道局, 政治家, 博物館, 美術館などから講演者が派遣された (Nifenecker 1917: 31-32)。講演者について詳しくは, ニューヨーク市第 42 公立学校の例が, 「付録 5 講堂で講演した学外者の名前」に紹介されている (Nifenecker 1917: 105-106)。
- 6 オーデュボン協会とは, 元々鳥類保護を目的に設立された団体であり, 1905 年には野鳥のみならず野生動物を保護する「全米オーデュボン協会」となっていた。それに倣って「学校オーデュボン協会」では, 鳥の種類や価値, 近隣の公園にいる鳥, 鳥の鳴き声などについて話し合った (Nifenecker 1917: 73)。

[文献]

- Columbia University, Teachers College, *Horace Mann School: Under the Auspices of Teachers College, Columbia University, New York, 1912-1913*, 1912.
- Diamonstein-Spielvogel, Barbaralee, *The Landmarks of New York: An Illustrated Record of the City's Historic Buildings*, fifth edition, New York: State University of New York Press, 2011.
- Dutton, Samuel T., "The New Horace Mann School," *Teachers College Record*, Vol. 3, No. 1, January, 1902, pp. 26-36.
- Gislason, Neil, "Building Paradigms: Major Transformations in School Architecture (1798-2009)," *Alberta Journal of Educational Research*, Vol. 55, No. 2, Summer, 2009, pp. 230-248.
- Gutman, Marta, "School Buildings and Architecture: United States," in *Encyclopedia of Children and Childhood in History and Society*, October 3, 2003.
(<http://www.faqs.org/childhood/Re-So/School-Buildings-and-Architecture.html>, 2012年11月15日アクセス)
- Koos, Leonard V., "Space-Provisions in the Floor Plans of Modern Elementary-School Buildings," *The Elementary School Journal*, Vol. 20, September, 1919, pp. 12-25.
- 宮本健市郎「アメリカ進歩主義教育運動における学校建築の機能転換—子ども中心の教育空間の試み(1)—」関西学院大学『教育学論究』創刊号, 2009年, 149-158頁。
- 宮本健市郎「アメリカ進歩主義教育運動における学校建築の機能転換—教師中心の教場から子ども中心の学習環境へ—」平成20年度～22年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書『新教育運動における学校空間の構成と子どもの学習活動の変化に関する比較的研究』(研究代表者: 渡邊隆信), 2011年, 5-28頁。
- Nelson, Donna R., *School Architecture in Chicago during the Progressive Era: The Career of Dwight H. Perkins*, Unpublished Doctoral Dissertation, Loyola University of Chicago, Ph. D., 1988.
- Nifenecker, Eugene A., *The School Assembly: A Handbook for Auditorium Exercises*, Department of Education, Division of Reference and Research, 1917.
- Perkins, Dwight H., "The School Building as a Social Center, Part I," *The Brickbuilder*, Vol. 24, No. 12, December, 1915, pp. 293-294.
- Perkins, Dwight H., "The School Building as a Social Center, Part II," *The Brickbuilder*, Vol. 25, No. 1, January, 1916, pp. 1-7.

Russell, James E., et al., "Horace Mann School: Dedication Number," *Teachers College Record*, Vol. 3, No. 1, January, 1902, pp.1-36.

Stieber, Zachary, "Discovering Legendary NYC Schools' Architect Charles B. J. Snyder: Your School May Have Been Built by Him," *The Epochtimes*, September 6, 2012.

(<http://www.theepochtimes.com/n2/united-states/discovering-legendary-nyc-schools-architect-charles-b-j-snyder-288725.html>, 2012年11月15日アクセス)

University of the State of New York, Division of Educational Facilities Planning, *School Buildings and Grounds. Law, Rules, Regulations and General Information, Extract from Volume 3 of the Tenth Annual Report of the State Department of Education*, Albany: The University of New York Press, 1917.

Wheelwright, Edmund N., *School Architecture: A General Treatise for the Use of Architects and Others*, Boston: Rogers and Manson, 1901.